

一 中国運搬船が長崎に水揚げした ハナアマダイと思われるアマダイ類 一

資源海洋部資源生態・環境グループ 酒井 猛

開発調査センター 山下 秀幸 中央水産研究所 柳本 卓



長崎に水揚げされたハナアマダイと思われる個体

標本番号: SNFR17772 380mmTL ; D VII,15 ; A II,12 ; P1 18 ; P2 I,5 ; LL 48 ; GR 7+13

東シナ海と周辺海域は日本のアマダイ類の主要な産地で、5種のアマダイ属魚類が生息しています。このうち主に水揚げされるのはアカアマダイ、シロアマダイです。かつては我が国のあまだい延縄漁船が東シナ海で広く操業し、漁獲物のほとんどが長崎魚市に水揚げされていました。ところが、1990年代以降に中国の刺し網漁船や底びき網漁船が多く出漁し、長崎魚市に水揚げするようになりました。この頃から、資源の減少や漁場の競合価格の低迷によって、日本のあまだい延縄漁船は急激に減少し、現在東シナ海でのあまだい延縄漁業はほとんど行われていません。現在、中国漁船によって漁獲され運搬船で長崎に水揚げされるアマダイ類は、我が国によるアマダイ類の漁獲量を大きく上回っています。

かつて東シナ海で漁獲されていたアマダイ類の多くは広範囲に分布するアカアマダイで、その他に西部の90mより浅い水域でシロアマダイが漁獲されていました。また、陸棚縁辺部の比較的底質の荒い水域でキアマダイがわずかに混獲されていました。これまでキアマダイについては、希にアカアマダイに混じって水揚げされる程度でしたが、近年中国船がややまとまった量を水揚げすることがあります。2011年4月1日に浙江省からの運搬船が水揚げした生鮮キアマダイ十数箱に、キアマダイとは外見が少し異なる個体が見られたため、2箱を入手して全個体について詳しく観察しました。

キアマダイとして水揚げされた2箱(59尾)のうち、キアマダイ51尾、アカアマダイ7尾、種が不明瞭な1個体が含まれていました(写真)。本標本は、アカアマダイの特徴

である眼後下縁の銀白色の三角斑やキアマダイの眼下銀白色線は認められません。これまでに、東シナ海からはアカアマダイとシロアマダイや、スミツキアマダイとアカアマダイの交雑個体も採集されています。本個体は背鰭膜の点列状の黒色斑や、尾鰭の黄色横帯や斑点も見られないことから、スミツキアマダイやシロアマダイまたはこれらによる雑種とも異なっています。背鰭前端鰭膜に暗褐色域があり、前鰓外骨の2列の鱗が周辺の鱗より大きい点が、ハナアマダイとされる未記載種(*Branchiostegus* sp.)の特徴と一致し、DNA分析の結果でも、沖縄県石垣島周辺で漁獲されたハナアマダイとほぼ同じ塩基配列であり、同種であると推定されました。

ハナアマダイは、アカアマダイ、キアマダイ、シロアマダイ、スミツキアマダイと同じアマダイ属(*Branchiostegus*)に含まれますが、これまで日本では南西諸島周辺以外からの採集例はありませんでした。本個体と同時に水揚げされていたのは、アカアマダイ、ヨロイタチウオ、イズカサゴ、アカムツなどであったことから、漁場は陸棚縁辺部とみられ、ハナアマダイが南西諸島周辺だけではなく東シナ海の陸棚縁辺部にも分布している可能性が示唆されました。

<資源海洋部では関係機関の協力を得ながら水産庁委託事業の一環として「アマダイ類(東シナ海)」の資源評価を担当するとともに、関係する情報・知見を収集し、国際資源調査事業にもその成果を出力しています。>